看護業務の負担軽減につながった医療器具の展示会

医師の使う医療器具各種

看護用品にまつわるエピソード

1970 年頃，医師は医療器具の種類を個人の好みで選択することができた。一方，看護婦は看護に必要な看護用具をなかなか購入できない状況にあった。医師の介助を行う看護婦は，それぞれの医師の好みに合わせて物品を準備しなければならなかった。そのため各病棟の医療保管庫には，同じ用途の違う物品が雑多に存在していた。当時，外来や手術場，中央材料室の 3 ヵ所を 1 人の婦長が管轄していた。婦長は医師の好みに合わせて物品を準備するために保管庫や他の病棟を往復しなければならない看護婦の行動に疑問を感じていた。医師の使う物品をある程度統一することでコストや看護婦の負担が軽減できるのではないかと考えた。そこで，院内で医師の使っているカテーテルやルンバール針，アンギオ針，手袋などの医療器具の展示会を計画し，業者や業務課と調整して病院の一角で開催した。各品目につき数種類が類展示され，それぞれに値段が表示された。展示会場では，各科の医師たちがお互いに物品に関し使った体験情報を交換したり，業者から説明を受けたりしていた。医師たちは得られた情報や物品の値段を考慮して物品選択を考えるようになった。その結果，医師の使用する物品がある程度，統一されるようになった。そのことは予測した通り看護婦の負担軽減につながった。また，看護用具の予算獲得については，データを示すことはできないが予算獲得の一助となればと思っていた。

（伊地千恵子，2004）

解説

1972 年 5 月 15 日，沖縄の日本復帰が実現し，沖縄の立ち遅れた本土との格差是正のための復帰特別措置法の適用，沖縄振興開発のための経済援助などが推し進められる時期[1)]にあった，諸制度が日本の行政管轄下に移管され医療行政も厚生省に移管された。

1）照屋寛善：戦後沖縄の医療，メジカルフレンド社，P235，1987.

（名城一枝，2004）